

課題見つけ取り組む子へ 家庭学習を改善

昨年度から家庭学習の在り方を変えた水戸市立石川小学校(豊田雅之校長、児童489人)。同校では「いしかわスタイル家庭学習」(自学ノートづくり)と呼び、子どもの自主学習を通じた自己肯定感の向上などがねらいだ。従来のドリル宿題は廃止。

宿題のドリル廃止 自学ノートを作成



子どもにアドバイスなどを行う豊田校長

関心事など見開きで整理 時間の目安「学年×10分」

「ドリル宿題をやめます」。豊田校長が保護者に直言したのは昨年11月中旬。体育館で家庭学習の説明会を開き、変化の激しい社会を生きる子どもたちにとって必要な学力を熱く語った。

超勤削減にもつながる

減少などを見据え、そう述べた豊田校長。「これまでと同じ教育では通用しない」と指摘し、ドリル宿題の問題点に触れた。具体的には、教師から一律に与える課題では子ども一人一人の実態に合っていない点。

水戸市立石川小学校

教育現場にも「働き方改革」が求められる中、昨年度と一昨年度の時間外勤務時間を比べると、最大約22時間の削減につながる月もあった。今後の学校教育に「石」を投じる取り組みになりそうだ。

もう一つは、自分で課題を見つけ、自主的に取り組む家庭学習にしていく必要性だった。こうした理由から、昨年度の11月下旬から「いしかわスタイル家庭学習」(自学ノートづくり)の導入に踏み切った。具体的な取り組みは、①一日の分量は「1ト見開き×2(最低)②時間は「学年×10分」(自主)③授業で学んだこと、

興味のあることなどをノートにまとめる④次の日の朝、学級担任に提出の⑤四つ。参考にしたのは、文科省が毎年実施している全国学力・学習状況調査で上位に位置する秋田県の実践。豊田校長の祖父が同県出身で、親近感があったことも理由の一つだったという。

昨年度は、理科の授業で行った実験についてさらに詳しく調べ、絵を加えて理解を深めることができた自分だけのノートを作成する子ども姿などが見られた。「まずは学習を好きになることが大事」と話す豊田校長。そのためには、自由に学ばせ、学びに没頭させることが必要と考えた。保護者からの意見や要望などは、学校のホームページ上に公開。他の保護者とも共有し、さらに良いものを目指して改善・修正している。

昨年度、試行期間と位置付けて取り組んできた「いしかわスタイル家庭学習」(自学ノートづくり)の成果や課題を踏まえ、本年度から本格的なスタートを切った。令和2年度版「いしかわスタイル家庭学習」の手引も作成・配布。1学期の新型コロナウイルス感染症拡大防止による臨時休業期間中は「自学」を進めてきた。「個別最適化」の学習を進めていくために、市教委とも連携しながら「Google for Education」の活用も視野に入れていく。

校長が率先し意識改革

一番の大きな成果は、「(宿題をやっていないから)学校に行きたくない!」という感情がなくなり、子どもの表情がさらに良くなったこと。時間をうまく活用できるように、家の手伝いに進んで取り組む子どもも増えているという。

難しかったことは、「ドリル宿題が一番!」と思っていた教職員の意識改革。「ドリルは3回繰り返してやるべき」という従来の考えからの脱却だった。そのため、教頭や教務主任とも共通理解を図り、機会があ

ることに新学習指導要領が改訂された背景とも関連付け「これからの教育」の話題に触れるようにした。その一方で、日々のドリル宿題の丸付けに疑問を抱いていた教職員も、学級担任だけでは「ドリル宿題をやめよう」と学力が低下してしまう「他の先生たちもやっているし」などの考えが頭の中をよぎり、学校全体を変えていくことするのは難しい部分がある。

そのため、「校長が矢面



新聞記事を使い、作成した子どもの「自学ノート」

1・1519

石川小 029・25